No.7 菩薩立像

特集

# 館蔵 珠玉の中国彫刻

## Thematic Exhibition: Highlights of Chinese Sculpture in the TNM Collection

**令和2年(2020) 12月1日(火)～令和3年(2021) 2月21日(日)**
**東京国立博物館　本館14室**
December 1, 2020 – February 21, 2021
Room 14, Japanese Gallery, Tokyo National Museum

明治22年(1889)に帝国博物館(東京国立博物館〈以下、当館〉の前身)の美術部長となった岡倉天心は、日本美術の淵源は中国にあるとして中国美術研究の必要性を説きました。そして明治26年に早崎梗吉を伴って初めて中国清朝に渡り、中国彫刻の調査や収集を始めたのです。

当館ではこれまでに収蔵した作品のなかから、大型像や著名な作品を選んで東洋館1室で展示してきました。しかし、小さい作品や、破損・補修が多い作品はほとんどご覧いただく機会がありませんでした。そこで、本特集展示では、これらの一部を本館14室で公開するとともに、中国彫刻を仏像以前に遡って理解するために、墓に副葬された俑も展示し、中国彫刻の新しい魅力を紹介します。本展にあわせて東洋館で展示している名品もご覧いただき、中国彫刻の多様で奥深い世界を楽しんでいただければ幸いです。

Featuring some of the more rarely exhibited works in the Museum's collection, this thematic exhibition presents a fresh look at Chinese sculpture as it traces its development from early, minimalistic tomb figures to more naturalistic Buddhist sculptures of later periods. Viewed in tandem with notable works in the Museum's Asian Gallery, the exhibition offers a unique glimpse into the rich and diverse world of Chinese sculpture.

### 中国彫刻の人体表現

ギリシャやローマの彫刻は筋骨隆々たる人体を表現し、インドの彫刻は柔軟で生々しい肉体を表現します。いずれも体の露出度が大きく、体のかたちがよくみえます。いっぽう中国の人体彫刻には、墓を護る石人や俑があります。ただし、頭と手以外はほとんど厚い衣服の中に隠れており、なかの肉体はあまり意識されていません。体幹部は衣服のなかの観念的な存在です。仏像というインド起源の肉体を重視する彫刻に対しても、この中国的な人体観が作用し、しだいに肉体と着衣のバランスが図られていきます。

## 陶俑にみる人体表現

俑は墓に納める人形のことで、殉葬の代わりとして造られました。型で大量生産する陶俑は出土数も多く、身分や職掌によって文官、武人、侍者、楽人、舞人、奴隷、胡人など多くの種類があり、服装や髪形、面貌で区別されています。漢代では人体としての表現は最小限にとどめられていますが、南北朝期（5〜6世紀）以降は仏教彫刻の影響を受けるようになり、唐時代になると骨格や筋肉を意識した人体彫刻になります。

2 加彩男子
Man　前漢時代・前2世紀
墓に納められたときにはちゃんと服を着ていました。

3 加彩女子
Woman　前漢時代・前2世紀

4 加彩宮女
Woman　唐時代・7世紀

5 三彩女子
Woman　唐時代・8世紀
胸の谷間が表現されています。

6 三彩神王
Divine General　唐時代・8世紀

# 仏像にみる人体表現

インドでは神像も仏像も豊かな肉体を表現します。敦煌や雲岡の石窟で初期に造られた仏像も、この肉体を重視する仏像を手本としていました。しかし、6世紀初め頃になると、肉体より衣服を重視する中国本来の感性が強まります。仏像は衣を幾重にもまとって体を隠し、肉体の量感がなくなっていきます。その後ふたたびインドの影響と中国的感性が交錯する時期がありますが、唐時代になると肉体とそれを覆う衣の表現が有機的な調和を達成し、中国風の人体表現が完成します。

7 菩薩立像
Bodhisattva　東魏時代・6世紀
明治37年夏に早崎梗吉が洛陽で入手しました。

8 菩薩龕像
Stele with a Bodhisattva with Two Attendants　西魏時代・6世紀

9 菩薩倚坐像
Bodhisattva with Two Attendants　北周～隋時代・6世紀

10 如来坐像
Buddha　唐時代・8世紀

## 龕像の多仏表現

中国では、石の面に龕（厨子のようなもの）を設けて尊像を浮き彫りする龕像がたくさん造られました。造像活動が地方や民間へと拡大するなかで、石は最も手近で使い慣れた材だったからでしょう。造像碑や碑像と呼ばれる大型で立派な石彫像に比べると、龕像の彫刻は造形的に劣りますが、ほのぼのとした明るさがあります。手ごろな大きさで、さまざまな尊像や仏名が記されるものもあり、庶民の信仰を知るうえで貴重な資料でもあります。

11 四面龕像
Stele with Relief Sculptures on Four Sides
北魏時代・5世紀

12 諸仏龕像
Stele with Buddhist Deities
北周時代・6世紀

## 陝北地方の土着様式

本像は、はれぼったい目や長い眉、口ひげなど、一風変わった面相ですが、肉髻があり、禅定印を結ぶことから仏教の如来像と思われます。衣に細い平行線を刻む特徴は、北魏時代に陝西北部一帯（陝北地方）で行なわれた地方様式です。陝西地方には漢代以来の石彫の伝統があります。仏教や道教の造像活動が地方へ広がった結果、仏像造りに習熟していなかった石工が仏像彫刻も手掛けるようになり、こうした素朴な作品が生まれたのでしょう。

背面にニワトリの線刻画があります。

18 如来三尊像
Buddha with Two Attendants
北魏時代・6世紀

## 道教像

道教は「無為自然」を説く中国の伝統思想で、その開祖とされる老子を「老君」「天尊」などと呼びます。道教では本来礼拝像がなかったのですが、仏像の影響で造るようになりました。老子は生まれたときすでに白髪であったと伝えられ、さらに賢者としてのイメージが加えられた結果、あごひげを生やして中国服を着け、ひじ掛けにもたれる老人の姿になりました。多くは麈尾（うちわのような道具）を持ちますが、本像にはありません。

19 天尊龕像
Stele with a Daoist Deity with Two Attendants
唐時代・天宝9年（750）

## 白檀の仏像

南方特産の香木として知られる白檀（または栴檀）を用いた仏像は檀像と呼ばれ、特別に尊重されました。中国製の檀像は、入唐僧らによって日本にもたらされ、奈良時代後期以降の日本における檀像の発展に影響を与えました。この二つの像は十一面観音を表わす中国製檀像（No.21は近代の模刻）で、頭上の化仏や繊細な瓔珞を含めて、全体を一材から彫り出す緻密な彫技が見どころです。

20 ◎十一面観音菩薩立像
The Eleven-Headed Bodhisattva Kannon
唐時代・7世紀

21 観音菩薩立像
（九面観音像）
模造
The Nine-Headed Bodhisattva Kannon (Copy)
明治26年（1893）
原品：唐時代・7世紀

## 白玉製の台座

玉は美しい石に対する美称です。中国ではさまざまな色の艶やかな玉が祭器や装飾品に用いられてきました。なかでも河北地方で産出される白玉（大理石）は品質が優れ、6世紀以降は仏像の材料として好まれました。この台座は四つの面に釈迦の誕生、苦行、鹿野苑説法、涅槃の各場面を浮き彫りで表わしています。背面の銘文中に「龍樹思惟像」と記されていますので、樹下で思惟する釈迦太子像の台座と考えられます。

1 龍樹思惟像台座　Pedestal
北斉時代・天保10年（559）

銘文

「誕生」

「苦行」

「鹿野苑説法」

「涅槃」

# 天龍山石窟から流出した石像

山西省太原市の西南40キロに位置する天龍山石窟では、東西両峰の計21窟に、東魏から唐時代にかけて仏像が造られました。しかし、20世紀初めに外国人が次々とここを訪れたことで、窟内の彫刻が削り取られて海外へ流出し、今も100件近くが欧米や日本に収蔵されています。そのなかには原位置が確認できない疑わしいものもあります。ここに紹介する天龍山石仏は、当館受け入れの経緯はさまざまですが、原位置は判明しており、東魏、隋、唐時代の特色をそれぞれ伝えています。

13 菩薩頭部
Head of a Bodhisattva　東魏時代・6世紀
第2窟西壁にあった菩薩像の頭部です。

14 菩薩頭部
Head of a Bodhisattva　隋時代・開皇4年(584)
第8窟東壁にあった菩薩像の頭部です。

15 如来頭部
Head of a Buddha　唐時代・8世紀
第18窟西壁にあった如来坐像の頭部です。

17 菩薩頭部
Head of a Bodhisattva　唐時代・8世紀

16 菩薩頭部
Head of a Bodhisattva　唐時代・8世紀

No.16とNo.17の菩薩頭部はそれぞれ、第14窟西壁にあった菩薩2像の一部です。

【参考】菩薩坐像
石造(砂岩)、彩色　唐時代・8世紀　TC-374
No.16菩薩頭部と本像は、もと一体。別々に当館の所蔵になって、再会しました。
※この像は展示されていません。

第2窟西壁右脇侍菩薩（No.13）

第8窟東壁左脇侍菩薩（No.14）と比丘

第14窟西壁二菩薩（No.16、17）

（外村太治郎『天龍山石窟』金尾文淵堂、1922年より転載）

# 東洋館１室‥中国の仏像

特集「館蔵　珠玉の中国彫刻」は、東洋館１室に展示中の中国彫刻の名品と関連した内容になっています。

◎如来三尊立像（にょらいさんぞんりゅうぞう）
石灰岩　東魏時代・６世紀　TC-646

◎勢至菩薩立像（せいしぼさつりゅうぞう）
銅造鍍金　隋時代・６世紀　TC-652

◎如来三尊仏龕（にょらいさんぞんぶつがん）
石灰岩　唐時代・長安３年（703）
宝慶寺将来　TC-768

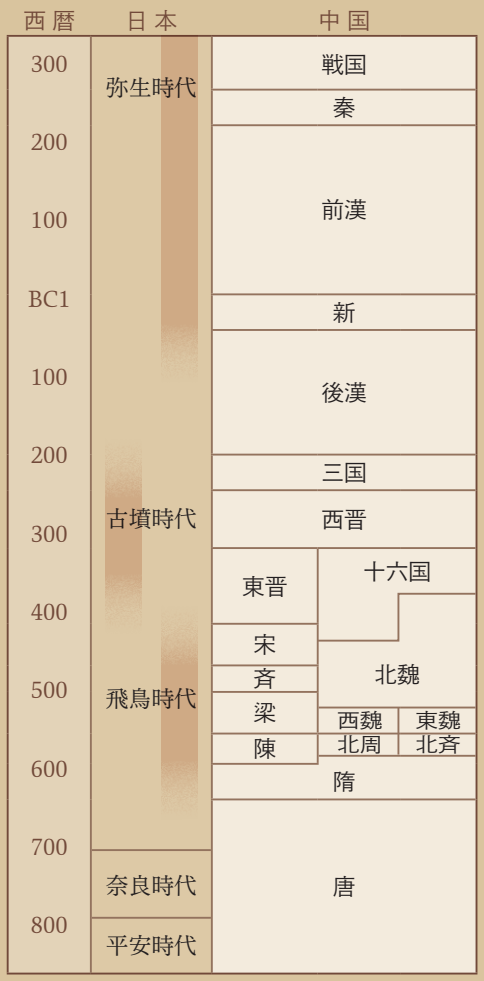
## 展示作品リスト

| No. | 指定 | 名称 | 品質 | 法量（cm） | 時代・世紀 | 作者、地域、伝来、寄贈ほか | 列品番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 龍樹思惟像台座 | 石造（大理石）、彩色 | 高20.2　幅51.3　奥行45.6 | 北斉時代・天保10年（559） | | TC-64 |
| 2 | | 加彩男子 | 陶製 | 高63.0 | 前漢時代・前2世紀 | 横河民輔氏寄贈 | TJ-682 |
| 3 | | 加彩女子 | 陶製 | 高57.0 | 前漢時代・前2世紀 | 広田松繁氏寄贈 | TG-2403 |
| 4 | | 加彩宮女 | 陶製 | 高38.1 | 唐時代・7世紀 | 広田松繁氏寄贈 | TG-2433 |
| 5 | | 三彩女子 | 陶製 | 高43.7 | 唐時代・8世紀 | 鈴木榮一氏寄贈 | TG-2896 |
| 6 | | 三彩神王 | 陶製 | 高98.0 | 唐時代・8世紀 | 横河民輔氏寄贈 | TG-652 |
| 7 | | 菩薩立像 | 石造（石灰岩）、彩色 | 高63.0　像高43.8 | 東魏時代・6世紀 | 伝河南省洛陽白馬寺旧蔵 | TC-59 |
| 8 | | 菩薩龕像 | 石造（大理石） | 高54.6 | 西魏時代・6世紀 | | TC-19 |
| 9 | | 菩薩倚坐像 | 石造（黄華石）、彩色 | 高43.1 | 北周～隋時代・6世紀 | 大谷探検隊将来品（西安収集） | TC-486 |
| 10 | | 如来坐像 | 石造（大理石） | 高42.5　像高27.7 | 唐時代・8世紀 | | TC-27 |
| 11 | | 四面龕像 | 石造（砂岩）、彩色 | 高19.1 | 北魏時代・5世紀 | | TC-58 |
| 12 | | 諸仏龕像 | 石造（大理石） | 高39.6 | 北周時代・6世紀 | | TC-29 |
| 13 | | 菩薩頭部 | 石造（砂岩）、彩色 | 高24.0 | 東魏時代・6世紀 | 山西省天龍山石窟第2窟、矢野鶴子氏寄贈 | TC-727 |
| 14 | | 菩薩頭部 | 石造（砂岩）、彩色 | 高32.6 | 隋時代・開皇4年（584） | 山西省天龍山石窟第8窟、根津嘉一郎氏寄贈 | TC-90 |
| 15 | | 如来頭部 | 石造（砂岩）、彩色 | 高36.0 | 唐時代・8世紀 | 山西省天龍山石窟第18窟、根津嘉一郎氏寄贈 | TC-92 |
| 16 | | 菩薩頭部 | 石造（砂岩）、彩色 | 高29.5 | 唐時代・8世紀 | 山西省天龍山石窟第14窟、熊沢正幸氏寄贈 | TC-737 |
| 17 | | 菩薩頭部 | 石造（砂岩）、彩色 | 高31.3 | 唐時代・8世紀 | 山西省天龍山石窟第14窟、根津嘉一郎氏寄贈 | TC-91 |
| 18 | | 如来三尊像 | 石造（砂岩） | 高35.5 | 北魏時代・6世紀 | | TC-26 |
| 19 | | 天尊龕像 | 石造（石灰岩） | 高32.2 | 唐時代・天宝9年（750） | | TC-57 |
| 20 | ◎ | 十一面観音菩薩立像 | 木造（白檀） | 総高60.0　像高42.4 | 唐時代・7世紀 | 奈良・多武峯伝来 | C-304 |
| 21 | | 観音菩薩立像（九面観音像）模造 | 木造、古色 | 総高48.5　像高37.2 | 明治26年（1893）<br>原品：唐時代・7世紀 | 森川杜園作、<br>原品：奈良・法隆寺蔵 | C-221 |

◎：重要文化財

## 中国地図

## 王朝年代表





特集　館蔵　珠玉の中国彫刻

令和2年（2020）12月1日発行

執筆：石松日奈子（東京国立博物館客員研究員）
展示企画：浅見龍介、石松日奈子、皿井舞、西木政統、増田政史
撮影：藤瀬雄輔ほか
翻訳：レベッカ・ハーモン（以上、東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：精興社
編集・発行：東京国立博物館


©2020 東京国立博物館　Tokyo National Museum